

1. 12/11~22、ミャンマーで第27回東南アジア競技大会(SEAゲーム)開催**①結果 : ミャンマーは金メダル数2位**

ミャンマーで開催されていた第27回東南アジア競技大会(SEAゲーム)が22日、閉幕した。ミャンマーは金メダル86個を獲得し、金メダル獲得数で総合第2位と躍進した。総合1位となったのはタイで金メダルは107個。12回目の1位で、参加国中で最も多い。3位はベトナムで73個、4位はインドネシアで65個だった。

一方、今大会ではローカルスポーツを多く取り入れているという。国際競技だけでカウントするとミャンマーの金メダルは26個で5位にまで下がる。2015年の第28回大会はシンガポールで開催される。

②ミャンマー選手団のユニホームのデザインはコシノジュンコ

1960年代、ミャンマーはSEAゲームのメダル獲得で2回トップとなったことがあるが、その後国際社会から孤立しスポーツ振興も振るわなかった。そのため今大会は、国際舞台に戻ってきたミャンマーが、1969年の第5回大会以来44年ぶりに開催し、話題となった。ミャンマー選手団の公式ユニホームは日本のデザイナーのコシノジュンコさんが手掛け、複数の日本企業が製作に協力した。中国も大会開催にあたり約34億円を同大会開催準備に支援した。

③12/16夜、サッカー観客が暴徒化

韓国人監督のミスで大会中に残念なできごとも起きた。決勝進出をかけた17日のインドネシアとの男子サッカーでは、1対0のミャンマー敗戦後、ヤンゴン市内の会場周辺で暴動が発生した。暴動は単純に試合に負けたからではなかった。発端は韓国人監督の確認ミス。「得失点の差で、1対0で負けても決勝に進出できる」と同監督が思い込んだため、インドネシアに1点を取られた段階でも、ディフェンダーを増やし、攻勢に出なかった。しかしSEAゲームでは勝ち点と同じ場合、直接対決の勝者が決勝に進出できるルールだった。監督は試合終了後も、「決勝に進出できた」と勘違い。選手たちが試合後に号泣していたため、初めてミスしたことが分かった。なお、下記のような別報道もあり、混乱している。



試合開始から80分後にベトナム人審判がミャンマー選手に、レッドカードを出し試合から外した。その時点で、既に観客は椅子等を投げ始めていた。警察も事態を悪化させないよう椅子を投げ込む人々の中に入り、やめさせようとしたが、逆に警察も殴られるなどの騒動に発展。90分経って余分5分間試合続けた後、審判が試合終了アナウンスをする。救急車や、警察等にあらゆる所から椅子を投げつけた。サッカー協会のトップがとめても、事態がもっと悪化。大量の警察が投入され、スタジアムの中は何とか鎮静化。しかしスタジアムの外では再び暴動が起き、観客は「恥を掛かすな。ミャンマーTシャツは脱いで燃やせ」などと怒鳴りちらし、Tシャツ等が燃やされた。さらに騒動が拡大し、暴徒が石などを警察に投げ込み始めた。最後に警察が400名程入って来て暴動を止めました。夜11時半にはスタジアムの前の通りを完全に閉鎖して、鎮めた。

④ヨット競技開催地で、土地接収への抗議も

第27回東南アジア競技大会(SEAゲーム)のヨット競技開催地エーヤワディ(イラワジ)管区グエサウン海岸で、シュエー族の企業が土地の接収をしていることに対し、地元の農園主や農民たちがポスターを張るなどの抵抗運動を展開している。

現地住民は、大会開催前から、いろいろと看板などを立てて抵抗運動をしようと予定していたが、大統領が現地に来るという情報でひとまずストライキは中止した。この土地返還問題は、最近になって起きた問題ではなく、これまでずっと起きていたという。地元政府は、28の会社に営業権を渡し、その資金でグエサウン海岸新区を新設し、約300棟の家を建設した。28社のほとんどはホテル経営をするため、政府から土地を買っている。その中でユザナ社とシュエー族の会社だけが今問題になっている。他の会社は、最近入ってきた会社で現在の相場で購入しているのだから問題はない。しかしユザナ社とシュエー族の会社は以前、道路の片側のみ所有権を持っていたが道路の反対側でも、土地を造成したり、店を建ててレンタルしたりしていた。ちなみにシュエー族の事業は、蝦や魚の養殖をする事業。そのため農民の不満が高まり「強引に取られた土地に対して賠償金を払え」といった看板を、村の住民達が自分の家の前に付けてある程度。それから現地住民は、村長と相談して不満の内容を文章にして政府関係に提出した。現地に大きなストライキはなかったし、現地住民は激しいストライキをする気もない。ただ何か結果が出るまで、看板などを付け続けて自分たちの意思を伝え続けて行きたいという。現地住民が地元政府に取られた土地代として、賠償金として支払われたのは1本のココナツ木に対して2500キヤット位程度だという。

2. 最近の外資の進出状況

・韓国のLG電子、ミャンマー市場にも有機ELテレビ投入

韓国のLG電子は有機EL(エレクトロルミネッセンス)ディスプレイを使用テレビをミャンマー市場に投入する。

・三菱商事、ミャンマーで初の石油ガス権益

12/17、三菱商事は、ミャンマーの沖合ガス田事業に出資することを明らかにした。イェタゲン・ガス田を含む「M12~14 鉱区」の権益の1.93%を取得する。三菱商事はミャンマーで初めて、石油ガスの上流事業に参画する。

・三井住友銀、ミャンマー銀行界の人材育成支援

12/18、三井住友銀行は1、ミャンマーの銀行業界団体であるミャンマー銀行協会(加盟25行)と金融人材の育成に関して提携の覚書を結んだと発表した。

・シンガポール企業、精糖工場建設

シンガポール企業が、約8,500万米ドル(約87億円)を投じて、ミャンマーに精糖工場を建設する。

・英不動産大手のサビルス、ヤンゴンに事務所開設

英不動産仲介大手のサビルスがヤンゴンに事務所を開設した。

・住商とシンガポールのヨマ合弁で、日野トラック販売へ

12/19、シンガポールのヨマ・ストラテジックは、日野自動車のトラックとバスをミャンマーで販売・整備する新会社を住友商事と合弁で設立すると発表した。

・千代田化工、レンタルオフィス開始

千代田化工建設は来年7月に、ヤンゴンでオフィス賃貸事業を開始する。

・タイのストレガ、ミャンマーに進出へ

タイのパイプライン敷設など地下掘削工事を請け負うストレガは、来年ミャンマーに進出する予定。ミャンマーなど周辺国ではエネルギーやインフラ関連工事が増えると期待しており、来年から周辺国市場を開拓する。

・インドネシアのITサービスのCTI、フィリピンとミャンマーに進出へ

12/19、インドネシアのITサービス会社コンプトレード・テクノロジー・インターナショナル(CTI)は、2014年にフィリピンとミャンマーへの進出を計画していることを明らかにした。

・台湾衛生陶器のHCG、ヤンゴンに展示場

台湾の衛生陶器大手である和成衛浴(HCG)がミャンマー初の展示場をヤンゴンに開設する。

・韓国の最大手銀、ヤンゴンに駐在員事務所

12/19、韓国の最大手行の国民銀行は、ヤンゴンに駐在員事務所を開設した。

・スズキ、ティラワ工業団地進出に意欲

12/24、スズキの鈴木修会長兼社長は、ミャンマーでの事業について「ティラワ(経済特区の)工業団地ができれば進出したい」と述べ、新工場建設に意欲を示した。

・三井住友FG、ミャンマー、カンボジア進出に意欲

三井住友フィナンシャルグループ(FG)の宮田孝一社長はインタビューに応じ、今後のアジア戦略について「ミャンマー、カンボジアやインドに興味がある」と述べた。

以上